ART PAPER Nagoya City Art Museum News
アートペーパー ART PAPER 111
名古屋市美術館ニュース　2019年夏号
Nagoya City Art Museum

feature article 特集

縁をつなぐ―海老原友忠《田端機関庫》をめぐって（１）

海老原友忠（えびはらともただ／1920－2003）の《田端機関庫》（挿図１）は、受贈により2010年度に名古屋市美術館の所蔵となりました。海老原は、戦前から国鉄に勤務し、兵役についていた５年を除いて、東京の隅田川駅に勤務していました[1]。隅田川駅は、旅客列車の発着のない貨物専用駅で、石炭や木材、砂利などを扱い、水路を引き込んで隅田川の水運とも連絡していました。《田端機関庫》が発表された1972年当時、海老原は転轍手を30年ほど務めていたようです[2]。1948年に全日本職場美術協議会に加入、1954年には全国鉄美術連盟の結成に参加しています。1967年に日本美術会、1971年に美術家平和会議に加入しています。海老原は、美術愛好家であり、職場の美術サークルに所属して絵を描くとともに、労働組合の活動に熱意を持って取り組みました。1954年に職場闘争のための壁新聞に挿図を提供します。「詩と絵の壁新聞」と呼ばれる連作は好評で、国鉄労働組合はその壁新聞を印刷してポスターにし、全国に配布しました。

名古屋市美術館は1998年に特別展「戦後日本のリアリズム 1945-60」を開催しています。壁新聞のポスター３種とそこに用いられた海老原の素描原画３点をこの展覧会において紹介しています[3]。

海老原は1971年12月15日付けで壁新聞の挿図として使用した作品を含む自作の素描８点を収めた画集『貨車のある風景』を自己の励ましとして自費出版しました。それを日頃からよく訪れていた現代画廊の経営者である洲之内徹（すのうちとおる／1913－1987）に「何時も珠玉の作品を見せてもらっている御礼として」贈呈しました。それがきっかけとなり、洲之内から現代画廊での個展開催を提案され、1972年６月20日から７月３日の会期で「海老原友忠素描展」が開催されます[4]。この個展には画集収録の８点に新たに描いたものなどを加えて24点の作品が出品されていましたが、《田端機関庫》はそのうちのひとつです。東京の田端にあった国鉄の田端機関区内のレンガ造りの機関車車庫を描いています。海老原の勤務地である隅田川駅は、田端

（挿図１）海老原友忠《田端機関庫》1972年 名古屋市美術館蔵

機関区に近い場所にあります。

《田端機関庫》は、「海老原友忠素描展」を訪れた作家の中野重治（なかのしげはる／1902－1979）に購入され、死去ののちも遺族である俳優の原泉（はらいずみ／1905－1989）のもとにありました。のちに中野と親しかった岡田孝一（おかだこういち／1927－2002）に原から記念として贈られ[5]、岡田の死後、遺族の藤森節子（ふじもりせつこ／1932－2015）から2010年度に名古屋市美術館に寄贈されています。藤森は、原の評伝を手掛けています[6]。

（挿図２）田村榮《Ｓの像》1928年 個人蔵

名古屋市美術館は、1999年に常設企画展「築地小劇場とその時代」を開催し[7]、新劇での活動に加えて日本の映画女優第１号としても知られる花柳はるみ（はなやぎはるみ／1896－1962）をモデルとした写真や彫刻を紹介しました。原泉の戦前の芸名である原泉子（はらせんこ）は花柳が名付けたもので、原は一時期、花柳の付き人を務めていました。「築地小劇場とその時代」展に出品された田村榮（たむらさかえ／1906－1987）の《Ｓの像》[8]（挿図２）は、相貌から原がモデルとなっていることがうかがえます。花柳や築地小劇場に関わる作品などは、名古屋市美術館で2009年に開催した特別展「躍動する魂のきらめき　日本の表現主義」にも出品されています[9]。

岡田孝一は、《田端機関庫》を自身の著作『中野重治 自由散策』（武蔵野書房 1995年）の表紙カバーに使用しています。藤森節子は、原の評伝をまとめた理由を「中野重治の妻としてだけではなく、一人の女性、一人の演劇人としての原泉を、じかに知りたいと思った」と記しています[10]。

藤森のもとへ筆者が伺うことになったきっかけは、亀山巌（かめやまいわお／1907－1989）についての調査のためでした。亀山は、名古屋タイムズ社の社長や名古屋市文化振興事業団の初代理事長を務めるなど、名古屋の文化の発展に寄与したことで知られており、詩人、文筆家、装幀家等々と多才を究め、豆本の制作出版者としても高く評価されています。筆者は職に就いた頃、幾度か姿を拝見し、挨拶をしたことがありますが、当時は亀山のことを良く知らずにいました。その後、亀山の没後しばらくして、豆本を含めて亀山の手掛けたものが公の機関にほとんど収蔵されていないことが分かり、遅ればせながら調査をはじめたところ、亀山と旧知であった岡本信也（おかもとしんや／1940－　）氏に教示と紹介の労をとっていただくことができました。岡本氏は、考現学調査の活動で知られ、編集者としても長年にわたり成果を残されています。

亀山については別の機会に詳しく紹介したいと思いますが、岡田孝一と藤森節子は、亀山と文筆家として交流するだけでなく、生業として営む印刷業者として豆本の制作と出版に関わっていました（挿図３、４）。亀山の信頼は厚く、豆本の装画カットの版下は処分権を含めて所蔵権は二人にあると記しています[11]。藤森のもとを初めて訪れたとき、岡田は既に死去しており、住いと二人の書斎があった離れを藤森が岡田の生前とほとんど変わらぬ状態で保っていました。処分と整理を考えはじめていたところだったので、亀山に関連するものとその他の美術関係の書籍を寄贈してもよいとのことで、１階と２階に分かれていた二人の書斎を調査し、希望をまとめ、

美術館そして私―80年代からミレニアムへ

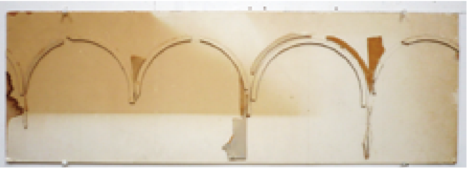
卒業からはじめての美術館企画展の依頼まで

美術家　山本富章

絵画ブームと呼ばれていた1970年代初め、名古屋市内には日動画廊や名古屋画廊など古くからの画廊があったが、百貨店でも海外作家の紹介もあり学生だった私は貪欲に作品を見てまわっていた。当時、前衛と呼ばれていた先鋭的な作品を紹介していた桜画廊などもあり、美術雑誌などで紹介されている作家の作品にも触れることができた。三芸大とともに新しい画廊がいくつも出来、卒業生はそれらの画廊で発表し始めるようになっていた。

2018年長谷川利行展が碧南市藤井達吉現代美術館で開催されたが、長谷川作品を初めて目にしたのは、テレビ塔の東側に出来たばかりのニシキ画廊ナゴヤで、私が学部を卒業した1973年春、銀色の表紙の図録が今でもある。また、今池にあった小さなバルール画廊では駒井哲郎や長谷川潔の版画作品だけでなく、それまで目にすることがなかったフォンタナやアルプやアルマンなどの実物が見られた。顔を覚えられた画廊主の池田氏から芸大の学生かと声をかけられ、県芸の学生ですと答えると、いつか作品を持ってこないかと言われ、大学院を出てから伏見に移った新しいスペースで個展をするようになった。大学の同学年だった平井健三君も声をかけられていて二人続けて個展をすることになったが、この際、オリジナル作品の入ったカタログを作ったらどうかという提案が池田氏からあった。平井君は東京の版画工房でリトグラフの作品を刷り上げ、私は刷り師のかたわらエンボスにコラージュという少し版画を逸脱した作品を用意した。二つの個展の合本は小さく薄かったけれども初めての印刷物の名前のロゴに高揚するものがあったが、刷り師を続ける中、単なる複数性だけではない、版的考察からの展開を模索している思いがそこに込められていたのではないかと思っている。

ほぼ２年ごとに発表を続けていると、83年、三重県立美術館『現代美術の新世代展』への出品依頼があった。選考委員によりこの地域だけでなく関東や関西からも多くの30歳前後の若い作家が選ばれていていると聞かされた。カタログに図版と自筆コメントも載るはじめての企画展で、私は横幅７メートルのパネル７枚組の黒白の大作を出品した。地元からは今井瑾郎、久野利博氏らが、遠藤利克、北山善夫、辰野登恵子氏など関東、関西の作家の作品が並ぶ質の高い展覧会であったと思う。すでに鬼籍に入ってしまった方もいるが、多くが現在まで発表活動を続け高い評価を受けている。



新世代展出品作の厚紙による１/10のファーストマケット

時の話題

当美術館がある白川公園では、６月10日まで木下大サーカスの公演が行われていました。グランドには、大きな赤いテントが出現。名古屋での公演は９年ぶりだったそうです。

せっかくの機会と思い、休みの日に公演を見に行きました。公演前には長蛇の列。でも並んでいる人もなんだか楽しそうな雰囲気。テントの中に入ると、円形に組まれた階段状の椅子が並び、天井近くにはブランコ、そしてテント奥にはオートバイがぐるぐると回る網状の球体などが目に入ってきます。薄暗いテントのなかは始まる前の期待と興奮で包まれていました。公演が始まり、空中ブランコ、マジック、シマウマによる曲芸、ホワイトライオンのショー。歓声と拍手が湧き上がります。そして合間には二人の道化師（ピエロ）が登場。彼らの軽妙なパフォーマンスに笑いがこぼれます。音響や照明の効果もあり、テントの中は日常とは違う時間が流れていました。

サーカスや道化師の姿は絵画や版画にもたびたび描かれてきました。サーカスは19世紀半ばからパリで人気の娯楽となり、19世紀後半にはナイトクラブの出しものとしても行われていました。1900年代初頭、ピカソがパリで好んでサーカスを見に出かけていたことが知られています。トゥールーズ＝ロートレックやスーラの作品を思い浮かべる方もいらっしゃるでしょう。５月26日まで当館で開催していた「印象派からその先へ－世界に誇る吉野石膏コレクション展」には、シャガールの作品《グランド・パレード》が出品されていました。作品の上部にはブランコ乗りが描かれ、階段状の客席にはたくさんの人。そして中央には馬の背にのる曲芸師。青、赤、黄色で彩られ、華やかで楽し気な雰囲気に包まれています。日本の浮世絵にもサーカスが描かれています。楊洲周延は、1886年にイタリアからチャリネ曲馬団が来日した際の天覧の様子を描いています。曲馬団が大きな話題となり人気を博したことが伝わってきます。

作家とまったく同じことを経験することはできません。しかし、作家が心を揺さぶられた場所に行ったり、同じものを食べたりして、作家が経験したであろうそのときを想像してみるのも楽しく、また作家・作品が身近に感じてくるように思えます。（I.）

ご了解いただいたものを2004年度に寄贈していただきました。

最初の訪問のとき、岡田の居室に通され、遺影を拝見しましたが、その前には骨壺が置かれてあり、斜交いの長押に《田端機関庫》が掛けられているのに気づきました。それぞれが、見る、見られる、といった塩梅だったように記憶しています。「あれは海老原友忠ですか。珍しいものをお持ちですね」という言葉かけからはじまって、そこにある経緯をお聞かせいただきました。そのとき、先述した名古屋市美術館の展覧会３つをご覧になられていたこともお知らせいただきました。

岡田、藤森、両氏の書斎には、浅学な筆者でも分かる稀覯本が少なからずあり、そのうちの詩や演劇などの美術にも関わるものを2004年度分の調査の折にご寄贈いただくようお願いしましたが、それらについては美術館よりももっとそれを必要としている人に譲りたいとの理由でご了解をいただくことができませんでした。《田端機関庫》については、厚顔の筆者でも寄贈のお願いを口にすることができず、大切になさってくださいとお伝えしただけでした。

それから５年ほどして、「書物はほとんどなくなったけれど、欲しいと言っていたものが残っているから、必要なら来てほしいのだけれど」と声をかけていただき、再度、亀山巖関連の資料などを選ぶとともに《田端機関庫》をあわせてご寄贈いただくことになりました。茨城県古河市に生まれ育った海老原は、名古屋市美術館の収集方針に直接に結びつく作家ではありませんが、渡米前の河原温をはじめ、既に作品を収蔵している戦後のリアリズムに関わりのあった作家と時代や傾向を同じくする作家のひとりとして位置づけています。寄贈の申し出は、こちらも既に述べた館の活動への評価とその証としてのご厚意であったと受け止めています。

岡田は、《田端機関庫》が原から譲られた経緯を下記のように記しています。

「書斎の解体、移築の話が進んでいた一昨年（筆者註：1987年）の夏の終わりころ、原さんから電話があり、母屋もいずれ整理することになるから、あなたになにか記念になるものを贈ろうと思う。考えてみたが部屋にかけてある田端操車場の絵をあげたいと思うから、東京へくる機会があったら一度寄るようにとのことであった。この絵は国鉄出身の画家、海老原友忠の作品で、洲之内徹の画廊で個展があったとき、中野さんと原さんが見に行ってもとめたものと聞いた。中野の初期詩編には汽車であるとか、機関車をテーマにしたものが多い上に、原さんが中野さんに「結婚しても俳優としての仕事は続ける」ことを認めさせて共同生活に入ったところが田端であって、近くに国鉄の田端操車場があった。そういう思い出があったのでずっと部屋にかけていたという話で、額の裏に原さんの字で海老原友忠筆（日本美術会員）と書いてある。この絵はいま私の部屋にかけられ、日夜中野重治、原泉を偲んでいる。」[12]

「中野さんが亡くなったのち、世田谷の家の書斎がとりこわされて、丸岡町の生家跡に移築されることになったとき、原泉さんがいろいろと整理することになるので、私ができるうちにと居間にかかっていた海老原友忠氏の田端操車場の絵を、記念に贈ってくれた。海老原氏は国鉄出身の画家で、洲之内徹の画廊で個展が開かれたとき、中野さんと原さんが見に行き、中野さんに機関車を題材にした作品の多いことや、二人がはじめて一緒に暮らしたところが田端操車場に近かったこともあって、求めた絵だということであった。額の裏に原さんの字で〈海老原友忠筆（日本美術会員）〉と記してあるこの絵と、『アサヒグラフ』にのった中野さん、原さんが向かい合って食事をしている写真は、いまこうして原稿を書いている私の部屋に飾られている。」[13]

文中の写真は、『アサヒグラフ』（朝日新聞社）1978年８月11日号の「わが家の夕めし」に掲載されたもので、同年１月に朝日賞を受賞した中野に祝いを述べるため岡田が上京した際に土産とした蓋つき容器（卵焼き容器）が食卓にあり､二人とともに写っています[14]。

藤森は、岡田を記念してその死後に『老パルチザンのあしあと』（梨花工房、2004年）を出版しています。「『老パルチザン』の由来」と題したあとがきのなかで、岡田が編集同人となっていた同人誌『幻野』を退会するに際して書いた「幕引きの弁」(1976年)に対して、中野から「賛成しかねる」旨をしたためた手紙が送られてきたことが書かれています。岡田は、この手紙を封筒とともに額に納め、藤森によれば「自分自身への戒めのために掲げていた」そうです[15]。　[本稿次号につづく]（み。）

＊本文中、物故者の敬称を省略しています。また、生没年についても一部を省略し、必要に応じて和暦と西暦を併記しています。

（挿図３）亀山巖《「名古屋豆本は企画・装画・編集・郵送まで版元の一貫作業です」より－亀山巖》制作年不詳　名古屋市美術館蔵

（挿図４）亀山巖《「名古屋豆本は企画・装画・編集・郵送まで版元の一貫作業です」より－岡田孝一・藤森節子》制作年不詳　名古屋市美術館蔵

（１）海老原友忠の経歴などは、下記を参照した。
海老原友忠『漫画闘争記』海老原友忠 1967年
海老原友忠『貨車のある風景』蒼海出版 1971年
「海老原友忠素描展」リーフレット 現代画廊 1972年
海老原友忠『ささやかな実践―私の美術と労働組合運動―』蒼海出版 1978年
海老原友忠（編集責任者）『資料による国労隅田川駅分会三十年史』国鉄労働組合隅田川駅分会 1978年

（２）注記（１）の他､「転轍手の描く「貨車のある風景」」『芸術新潮』第272号｜1972年８月号 新潮社 p.138

（３）「戦後日本のリアリズム 1945-60」（会期:1998年４月18日－７月12日）
挿図版は図録のP.82、出品目録該当部分はp.153。なお、壁新聞の第１作は「二十一人を救え」である（『ささやかな実践』pp.27-33および『資料による国労隅田川駅分会三十年史』p.32）。

（４）海老原『ささやかな実践』pp.117-119
海老原友忠「一人歩きしたコンテ作品」「回想の現代画廊」刊行会編『洲之内徹の風景』春秋社 1996年 pp.119-122
洲之内徹「「貨車のある風景」について」「海老原友忠素描展」リーフレット 現代画廊 1972年 ＊「海老原友忠「C57機関車」」として加筆修正して『絵のなかの散歩』（新潮社 1973年 pp.259-261）に収録。
現代画廊での海老原友忠の個展は二度開かれている。二度目の会期は1975年７月７日から19日である。洲之内が海老原について書いたものは、他に下記がある。
洲之内徹「モティーフの発見」『アトリエ』No.568|1974年６月号 アトリエ社 p.84

（５）岡田孝一『中野重治 自由散策』武蔵野書房 1995年 pp.129-130 および pp.158-159

（６）藤森節子『女優 原泉子－中野重治と共に生きて』新潮社 1994年 ＊原泉子（はらせんこ）は、原泉の戦前の芸名である。

（７）「築地小劇場とその時代」（会期：1999年９月７日－11月28日）

（８）「築地小劇場とその時代」展図録p.97に図版掲出

（９）「躍動する魂のきらめき 日本の表現主義」（会期：2009年８月25日－10月12日）

（10）藤森『女優 原泉子』p.244

（11）亀山巖「名古屋豆本の二十年」『象』18号 グループ・象 1994年３月15日（没後５年特集『亀山巖の小宇宙』）p.29

（12）岡田、前掲 pp.129-130。引用記述のある「サヤ豆を育てた風」の初出は、『社会評論』75号、1989年11月

（13）岡田、前掲 pp.158-159。引用記述のある「ジグザグの道をたどりながら」の初出は､『中野重治研究月報』48号、1990年６月

（14）岡田、前掲 pp.157-158

（15）藤森節子編『老パルチザンのあしあと－岡田孝一の記録』梨花工房 2004年 pp.231-232
梨花工房の在所は藤森の自宅である。名称は中野の小説「梨の花」に因むのだろう。

展覧会の舞台裏

「広報と著作権の話」

昨年2018年12月､「環太平洋パートナーシップ（TPP）」の協定により、著作権の保護期間が50年から70年に延長しました。TPPという言葉はテレビのニュースなどでよく耳にしていましたが、今一つピンとこない、というか他人事として関心を払っていませんでしたが、この著作権の話題によって一気に我が身に降りかかってきました。皆さんご存知のように、映画、音楽、文学、そして美術など、著作者が特定されているものには全て著作権が認められています。その文章や、図像、音源を利用して複製物等を制作する際には、必ず著作権者の許諾を得、さらに著作権料を支払う必要があります。保護期間というのは著作者が亡くなった翌年から起算され、例えば日本画の巨匠、横山大観の場合は1958年に没していますので、従来の保護期間50年があてはめられ、2008年末日をもって著作権が失効しました。いったん失効した著作権は、今回のTPPの対象にはならないので、横山大観の作品の複製物を制作するにあたって現在は著作権の許諾は必要ありません（もちろん作品の所有者等、関係者の許可は別途必要となりますが)。一方、当館のコレクションにもなっている藤田嗣治は、1968年に没していますので、通常であれば2018年末日を持って著作権が失効するはずでしたが、その直前にTPPの協定が結ばれましたので、さらに20年延長して2038年まで著作権が保護されることになります。さらに、TPPだけでなく、作家によって第二次世界大戦中の期間を追加する、戦時加算などの例外もあり、また著作者の出身国によって保護期間が異なる（メキシコは100年）など、著作権の内容は大変複雑です。

美術館で展覧会の広報のために、ポスター、チラシ、ホーム・ページなどで図版を使用する際には、この著作権の扱いを慎重に処理する必要があります。手間と時間とお金が必要な処理ですが、逆に言えば それを惜しまなければそれほど難しいことではありません。問題なのは美術館から発信する情報ではなく、外部の方々、すなわちマスコミから発信していただく情報の場合です。例えばピカソ展を開催し、広報のためにその出品作の図版を美術館からマスコミに配信することは簡単なのですが、マスコミの側がその図版を利用して、新聞や雑誌、テレビ等の媒体を通じて紹介しようとすると、その大きさや、白黒、カラーの別、放映時間の長さ等によって著作権料が発生し、その処理をマスコミ側にお願いしなければならないのです。さらに展覧会場で直接作品を撮影する場合も、周囲の観客と重なっていれば大丈夫だが、単独で撮影した場合は著作権が発生するなどなど、とにかくその規則は複雑極まりなく、そんなことなら取材は中止する、とトラブルに発展する場合もなきにしもあらずなのです。「広報はしたいと思えど、広報はあまりにも難し」。萩原朔太郎ではありませんが、ジレンマに引き裂かれながら、苛立ちのあまり歯噛みすることもしばしばです。(F)

感想ノートから

辰野登恵子　ON PAPERS: A Retrospective 1969-2012

2019年２月16日㈯～３月31日㈰

辰野登恵子（1950－2014）は長野県岡谷市に生まれ、1970年代から亡くなる直前まで抽象表現の可能性を追求した画家です。1980年代半ばには名古屋で滞在制作していたこともあります。会場壁面に散りばめられた画家の言葉に触発されたのか、今回の感想ノートには来場者がそれぞれに作品と丁寧に向き合い交わした、内なる対話のような言葉が率直に綴られていました。

★ずっと本物を見てみたいと思っていました。自分も描いていくための勇気が出た気がします。／★色彩がとても豊かで、素晴らしい芸術作品でした。エネルギッシュな感性と表現力があふれ画面から伝わるようでした。油彩やパステル、水彩、エッチング、シルクスクリーンとあらゆる手段と方法で作品が構成されて、オリジナルな世界観をかもしだしている。／★始め作品数が多くて見るの大変だろうなと思っていましたが、観終わると、全然足りない、もっとみたい、知りたいと思うようになりました。／★全く知らない方、そのうえ､抽象画は苦手なのですが､ポスターのやわらかな青にひかれて見にきました。どの時代も常に新しいことに挑戦し、変革をつづけていったことがよくわかりました。難しいことは考えず、色と形を楽しむことができ、とてもよかったです。絵単体ではなく、絵同士の色や光が相互に影響し合い、その点も印象に残りました。／★きれいな作品で１人の方の『視覚の冒険』を辿るのはとても興味深かったです。展示の最後には『この先の展開が見てみたかったのに…残念』と思いました。／★今まで見た展示の中で、一番胸を打たれました。規則正しくある格子に対してのある種の衝動のようなものを感じる作品が多く、心の中にうずまいている闇のような部分が作品制作の原動力であり、同時にこの作品を魅力的に見せているのだと感じました。／★見ている世界のゆがみやひずみから、見えない世界が広がっていく、どこにもない世界観でした。／★久しぶりに心の晴れる展覧会でした。辰野さんの作品をみたのは初めてですが、絵画全体の技法や作法をよく知った今日の展開という思いがしました。本当に知的な感性の豊かさに満ち足りた気持ちを抱きました。（３）

展覧会 現在進行形

カラヴァッジョ展

2019年10月26日㈯～12月15日㈰

まさか名古屋市美術館でカラヴァッジョ展が開催できるとは、それも晩年の傑作《ゴリアテの首を持つダヴィデ》が来日するなんて、個人的には未だに信じがたいです。2009年のだまし絵展で展示が叶ったアルチンボルドの《ウェルトゥムヌス(ルドルフ２世)》(スウェーデン、スコークロステル城所蔵）も、まさかの出品承諾でしたが、今回はそれに匹敵する、あるいはそれ以上の驚きかもしれません。

今回の展覧会が実現すれば、日本で３度目のカラヴァッジョ展となります。１度目は2001年に東京都庭園美術館と岡崎市美術博物館で開催された「カラヴァッジョ 光と影の巨匠―バロック絵画の先駆者たち」、２度目は2016年に国立西洋美術館で開催された「日伊国交樹立150周年記念 カラヴァッジョ展」です。2016年の展覧会の反響で、美術愛好家の間では間違いなくその存在の大きさが認知されたと思いますが、一般的なカラヴァッジョの知名度となると、まだその実力ほどには高まっていないようです。現存するカラヴァッジョの真筆は、一説には60点余りといわれており、その数の中には礼拝堂の装飾画のように、ほぼ移動不可能な作品も含まれています。そのため、イタリア国外、とりわけローマ以外でカラヴァッジョの作品をまとめて見られる機会は限られているのです。

そもそも、いったいカラヴァッジョの何が凄いのか。一応説明することは可能です。同時代の画家と比較すると、カラヴァッジョの画力、とくに写実的かつ迫真的な描写は抜きん出ています。また、たとえば神が起こした奇跡といった、決定的瞬間を表現する見事な構図、これを劇的に演出する光と影の描写により、カラヴァッジョの絵画は比類なき緊迫感を漂わせています。しかし、一番重要で矛盾に満ちた魅力は、カラヴァッジョ研究者の宮下規久朗氏が指摘する「美術史上最も現実的で俗っぽいと思われるカラヴァッジョの作品は、どんな宗教画にもまして神聖さを感じさせてくれる」(『もっと知りたい カラヴァッジョ 生涯と作品』東京美術、2009年）という事実です。これぱかりは、実際にその作品を見て実感していただくしかありません。ぜひ、この機会をお見逃しなく。(nori)

郷土の作家たち

三國庄次郎（みくに　しょうじろう／1895－1966）

福井県三国町（現.福井県坂井市三国町）に生まれる。小学校卒業後、遠縁を頼って来名、やがて中区南大津町の〈中村写真館〉に入門する。1920（大正９）年４月、独立して名古屋栄にあった〈中央バザール〉（栄町六丁目､広小路沿い）に写真館を開設している。

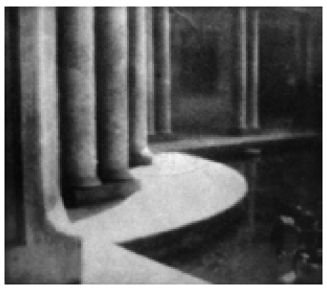
営業写真師として知られた三國庄次郎は、修業時代より「芸術写真」を研究する「写真家」でもあった。1916（大正５）年、写真芸術の最高峰である〈東京写真研究会〉が主催する「第六回研展」に初入選し、翌1917（大正６）年には、「名所名勝懸賞」等全国規模の「懸賞写真競技」に於いて、上位入賞を果たしている。さらに､1921（大正10）年１月、大阪朝日新聞社が『アサヒグラフ』を創刊するにあたり、創刊号に掲載すべき写真を募集した「新年勅題懸賞」（課題「社頭暁」）に応募、二等を獲得した三國庄次郎の作品は、以後毎年行われる勅題写真の先例を示した。

また、地元名古屋に於いては、当時精緻なゴム印画技法によって、日本の「芸術写真」の黄金時代を現出しつつあった〈愛友写真倶楽部（愛友）〉の第三回展（1920年）に出品、会員外の部で上位入賞を果たした｡翌1921（大正10）年に入会した三國は、“新進作家”として、停滞しつつあった同倶楽部の表現に新たな展開を与えることとなる。

この時期アマチュア写真家の間で大流行となったソフト・フォーカス・レンズは、対象との距離を曖昧にし、写真家は現実の風景や肖像に「紗をかける」ことによって、そこに自身の感情や情緒を込めようとした。三國庄次郎の表現とは、そうした言わば、描写しない写真をさらに押し進め、画面を光と影の構成にまで還元するものであった。

1922（大正11）年、同時期に愛友に入会した高田皆義が創刊した芸術写真研究雑誌『銀乃壺』に参加､1924（大正13）年には〈NCC（名古屋カメラクラブ)〉を結成し、「光画」と呼ばれた写真の新たな表現を提示する作家として全国で注目されることになる。ただ、彼が目指した表現は営業写真（館）に求められた技術とは全く異なるものであった。

一方、彼が設立した写真館は、その後三代に亘って引き継がれ、現在〈株式会社写真のみくに〉として、昭和区藤成通りで各種撮影を行っている。（J.T.）



三國庄次郎《円い柱の習作》
1923（大正11）年
写真画集『白陽』第２巻第７号掲載

三岸好太郎（みぎし　こうたろう／1903－1934）

札幌出身の三岸好太郎は､妻の三岸節子（旧姓・吉田）が愛知県一宮市出身であること、三岸自身が名古屋で客死したことから、この地方にゆかりのある作家として当館でも作品を収集してきた。三岸が当地方の作家たちに影響を与えた事実も強調しておきたい。

1903年、札幌に生まれた三岸は、札幌第一中学校を卒業すると同時に上京。苦学しながらも、1923年春陽会第１回展に入選、翌年の第２回展では春陽会賞を首席で受賞し画壇の注目を集める。同年９月に節子と結婚。1929年の春陽会第７回展では、道化を描いた作品で情感豊かな人物表現に到達した。1930年、独立美術協会の創立に最年少で参加。1932年頃から画面を引っかいて線を描く手法によって、造形性に重きを置く作風へと転換。1934年の第４回独立展では蝶や貝殻をモティーフにした作品を発表し、急速にシュルレアリスムに接近。同年７月１日、旅先の名古屋で持病の胃潰瘍が悪化し急逝（享年31歳）。

急死の報を受け、枕元に駆け付けた一人が名古屋の画家・写真家の下郷羊雄であった。下郷は1933～34年頃に名古屋で三岸と知り合い、独立美術協会とのつながりを得て、第４回独立展で初入選を果たしている。三岸への追悼文（『パレット』第４巻10月号、1934年）を読むと、当時は三岸の前衛性に対して理解が及ばなかった様子がうかがえるが、翌年の個展以降急速にシュルレアリスムに傾倒していくことから、下郷にとって三岸との出会いがシュルレアリスムの出発点になったと考えることもできるだろう。

下郷同様、名古屋のシュルレアリスムをけん引した吉川三伸も、三岸に師事した一人である。吉川は、1933～34年頃に三岸に学び、フォーヴィスムやピュリスムなどの新たな思潮と接した。中でもシュルレアリスムに深く傾倒し､1937年には当地で下郷らとともに「ナゴヤアバンガルドクラブ」を結成した。

名古屋市出身の伊藤廉は、独立美術協会結成時のメンバーの一人であり、三岸と深い親交があった。道化シリーズを評価して作品論を展開したほか、建設中だった三岸の新しいアトリエの完成も見届けている。フォーヴ調の重厚な作風の伊藤は、シュルレアリスムに傾倒し始めた頃の三岸について、「藝術上の立場では、近頃の三岸君とはお互に反對」だったというが（『アトリエ』第11巻第８号、1934年）、三岸独自の繊細な感覚を理解し、評価していた。（haru）

三岸好太郎《海と射光》
1933年 名古屋市美術館蔵

どこがおもしろい?!

鷲見麿
左：《13人の青紀No. 3 》1990年
右：《13人の青紀No. 6 》1990年

油彩・キャンヴァス　162.1 ×130.3 cm（２点とも）

今回は、鷲見麿（すみまろ）（1954－　）の《13人の青紀No. 3 》《13人の青紀No. 6 》（いずれも1990年）を取り上げます。2018年12月８日から2019年２月３日までの期間に、名品コレクション展Ⅲ（前期）で作品に寄せられた来館者の皆さまからのコメントを紹介します。

「No. 3 とNo. 6 の違いが分かりません。」（SAORIさん、29歳）

「間違い探しをしてしまった。」（ママルトさん、40歳）

「少し顔の表情が違う？なぜ複数も描いたんだろうか。」（名無しさん、35歳）

「ほぼ同色、同位置で描いているのですが、似て非なり。ナゼ同じに見えないのか不思議ですが、靴の形の違いが気になりました。」（PAPAさん、？歳）

「立体視をすると背景が遠くに見える。人物はほぼ同じで木や草が微妙に異なるため、人物のみ手前に見える。」（美俊さん、54歳）

「左の絵は若い頃の女性、右の絵は何十年かを経た現在の姿ではないでしょうか？セーラー服着てるけど。髪のボリューム、あごの下の影…右は光が強く当たっているので若く、左と同じように見えるのでは…」（ユキん子さん、26歳）

「風景と人物を直接描いたオリジナルの絵と､その絵を模写した絵の違いはなんなのか。また模写をくり返した末に描かれた絵は、オリジナルの絵と同じモノを描いていると言えるのかと考えさせられました。」（太郎さん、23歳）

「全く同じに見えても、次のフレームでは別のモノになっているということが表現されていると思う。この瞬間、風景は全く別のものに変化し、同じものは２度と作れないんだということに気づかされる。緑の色、筆のかすれ、足の位置…２枚無ければ変化は生まれなかったはず。あえて２枚。だから２枚。」（しおさん、27歳）

「No. 1 よりNo.13まで順に描かれたうちの２枚でしょうか？絵画は写真ではありませんので上手く描く必要も、同じものを描く必要もありません。なるほど、この実験的な試みそのものがオモシロイのだと思いました（そもそも13枚あるかどうかも分かりません。タイトルからイメージしているだけなので）。」（しーぱぱさん、52歳）

「青紀とは？名前なのか何なのか…No. 1 からNo.13まであるのかな。あるとしたら13人の“青紀”はどこにいるのかと想像がふくらみます。描き方もほぼ同じようにしていて少し怖いのですが、顔にこだわりを感じたので、深い深い想い人なのでしょうか。大自然？にいるのもとても気になります。」（SAKIさん、28歳）

「絵というものは、人が描く以上、絶対同じにならないですね｡どれだけ正確にまねても、微みょうにちがったりします。そういう点では写真と違い、この世に同じ作品は２つは存在しないという唯一性が絵を高価にならしめているのでしょうか。今では３Ｄプリンタとか、コピー機等で簡単に作品を大量生産できますが、なんか味け無いというか、みんなと一緒的安心感に浸って、没個性とはなっていないのか。もっと自分の人生というものを自分らしく生きたいし、他の人の生き方も尊重してゆきたい。きっとそれが人間なのだから…。」（秀隆さん、48歳）

「機械によるコピーではなく、人間が同じ絵を描くことの意味とは。同じ絵であっても違う作品と認識され、描かれた順番は意味をなさない。オリジナルとコピーとの本質を考えてみよう。オリジナルにこそ意味があると考えるのか。芸術家は作品の意義について悩み続けなければな（らな）い。鑑賞する人が思考停止しないようにするのも芸術作品には大切なように思う。」（Jiroさん、15歳）

鷲見麿は岐阜県に生まれ、中学を卒業後、独学で絵画制作を手掛け、中部地方を中心に評価を得ている画家です。名画やグラビアの模写に、憧れの対象である美女を描き加えることで独自の世界観を作り出す手法をとっています。大きく分かれた太い木の幹は、もとはファッション雑誌の中でモデルの背景に写っていたもので、モデルを“青紀”に置き換えたものです。“青紀”は、モデルになった実在の女性の名前です。

コメントにもあるように、同じ作家が描いた同じ絵であっても、筆致や肌合い、色や形の微妙な差異によって一つ一つ異なる作品と見なされます。２つともオリジナルであることは、コピー（複製）を低く見る従来の考え方からすれば歓迎されそうなものですが、酷似した図柄は私たちをかえって混乱させます。「同じ人間は一人もいない」という自身の存在意義に関わる価値観が、似て非なる一方に違和感を生じさせるのかもしれません。ぜひ一度、13点並んだ状態を体感してみたいものです。（３）

協力会通信

名古屋市美術館協力会が年に２回実施している恒例のバスツアー、今年の春は浜松市美術館がリニューアル１周年を記念して「没後70年 上村松園展」を開催していることから、日帰りで浜松と静岡をめぐる行程を組みました。バスは朝８時に名古屋駅を出発、今回は約40名が参加しました。

午前中に訪れた浜松市美術館では、「上村松園展」担当の学芸員の方が、会員のため特別にギャラリートークをしてくださいました。当館は2013年に「上村松園展」を実施しており、会場ではその時出品された作品に再会することができました。画中の着物と同様の文様をもつ打掛が作品の隣に展示されたり、松園が参考にしたであろう古画が実際に作品の隣に展示されたりといった試みもあり、何度も美人画を目にしている鑑賞者にとっても新たな発見があったのではないかと思います。

昼食のあと静岡市内に入り、まず静岡近代美術館を訪れました。この美術館は2016年10月に開館したまだ新しい私立美術館で、地元企業の代表取締役社長を務める大村明氏が集めた美術品を公開しています。この時期は１階の展示室で「荻須高徳展／熊谷守一展」を開催中で、当館も両者の作品を数点所蔵していますが、特に荻須の戦前滞欧期の作品、熊谷の《猫》や《裸婦》といった質の高い作品を見ることができたのは幸運でした。２階にはカミーユ・コローによる美しい風景画やアルベール・マルケが描いたセーヌ川の情景などが展示されており、こちらも見応えのある内容でした。予定にはありませんでしたが、会員のために大村様が急遽駆けつけてくださり、ご自身のコレクションについてお話しくださいました。

次に静岡市美術館で「小倉遊亀と院展の画家たち展」を鑑賞しました。多目的室で展覧会担当の学芸係長様に小倉遊亀の生涯と出品作品の見どころについて解説いただき、その後自由に鑑賞しました。展示作品のほとんどが現在休館中の滋賀県立近代美術館の所蔵品ということで、そのコレクションの充実ぶりに驚かされる内容でした。ちらしや図録の表紙に掲載された《姉妹》という作品に関心を持った会員が多く、簡潔な構図ながら、こどもらしい表情や仕草、姉と妹の立場の違いを見事に表現した遊亀の力量と洞察力に魅せられたようでした。（nori）

イベントガイド

■特別展
あいちトリエンナーレ2019　情の時代

会期：2019年８月１日㈭～10月14日（月・祝）

あいちトリエンナーレは３年に一度、愛知県で開催する国際的な現代アートの祭典。名古屋市美術館では、約10組のアーティストによる国際現代美術作品を展示します。

※トリエンナーレ会期中に、夏休みこどもの美術館「アート・プレイグラウンド」を開催します。詳しくは、名古屋市美術館ウェブサイトをご覧ください。

■特別展
カラヴァッジョ展

会期：2019年10月26日㈯～12月15日㈰

驚異的な画力と斬新な発想によって、400年前の美術界に新風を吹き込んだイタリアの天才画家カラヴァッジョ。日本ではほとんど見られない貴重なカラヴァッジョの絵画約10点（帰属作品を含む）を、その追随者ら同時代の画家たちの作品約30点とともにご紹介します。

【関連催事】

○記念講演会
日時：10月26日㈯　14：00～15：00
講師：小佐野重利氏（本展監修者／東京大学名誉教授）

○記念講演会
日時：11月10日㈰　14：00～15：30
講師：宮下規久朗氏（神戸大学教授）

○作品解説会
日時：11月23日㈯　14：00～15：30
講師：保崎裕徳（名古屋市美術館学芸係長）

※いずれも２階講堂・無料・先着180名。

■常設展　名品コレクション展Ⅱ

会期：2019年８月１日㈭～12月15日㈰
８月１日㈭～10月14日（月・祝）：前期
10月26日㈯～12月15日㈰：後期

※名古屋市美術館のコレクションから厳選した作品を紹介。６月に当館へ寄贈された藤田嗣治の絵画《二人の祈り》《夢》も展示します。

■コレクション解析学

日時：９月29日㈰　午後２時から
演題：「喜多村麦子の人と芸術」
２階講堂・無料・先着180名
講師：保崎裕徳（名古屋市美術館学芸係長）
作品：喜多村麦子《暮れ行く堀川》1928年

休館日＝月曜日（祝休日の場合は開館し、翌平日休館。ただし８月13日、９月24日は開館）、展示替期間（10月15日～25日）（TT）

展評

2019年４月27日(土)～６月９日(日)
碧南市藤井達吉現代美術館

北大路魯山人
古典復興―現代陶芸をひらく―

北大路魯山人（1883－1959）――篆刻、書、絵画、漆芸と幅広い芸術を生み出し、食への深い関心からやきものを手掛けたことで知られている。この魯山人の作品に同時代に活躍した川喜田半泥子、荒川豊蔵、八木一夫らの作品を加え、さらに中国、朝鮮そして日本の古陶磁を合わせて展示し、20世紀（昭和）の陶芸を紹介する展覧会が、碧南市藤井達吉現代美術館で開催された。会場では、魯山人と中国陶磁から始まり、朝鮮、桃山陶、尾形乾山、そこに半泥子、豊蔵らの作品が組み込まれ、最後にはイサム・ノグチの作品も展示され、総数200点におよぶ充実した内容であった。

本展は、副題にある「古典復興」が重要な軸であり、「長い年月をかけてこの国に積み重ねられたやきもののさまざまな美をすくい上げた魯山人」（カタログより）の姿が見えてくる。魯山人は志野焼の茶碗制作にその形状を朝鮮半島の古陶磁に由来する熊川茶碗に拠るなど、自らの発想から「古典の編集」を行っているという。やはり目を惹かれたのは、魯山人らしい器として知られる「俎鉢［まないたばち］」である。脚の付いた板皿のようなつくりで、板皿は四方の縁に向かいゆるやかに持ち上がっている。桃山時代の織部にはない、斬新な発想からの造形を創り出している。展示作品の《織部秋草文俎鉢》は、秋草

「北大路魯山人展」展示風景
写真提供：碧南市藤井達吉現代美術館

が風で左右に揺れており空間の広がりを感じさせ、《織部間道文俎鉢》は釉の色味が美しい。これらは魯山人との深い縁で知られる名古屋の老舗料亭の八勝館の所蔵である。どのような料理がこの器に盛られて、食されたのか、想像し愛でるのも楽しい。

来館者の多くがケースの前に後ろにと回り込み観覧していた。ケースの高さによっては背伸びをしても茶碗の見込みが見えないときがあり少し残念な思いになったが、それだけ観る者に興味をわかせる作品ともいえるだろう。《日月椀》といった魯山人の漆芸の代表作や書画も含まれており、多彩な内容が興味の幅を広げてくれる展示であった。(I.)

展評

2019年４月27日(土)～６月16日(日)
東京ステーションギャラリー

ルート・ブリュック 蝶の軌跡

昨年、名古屋市美術館では北欧・フィンランドの建築家アルヴァ・アアルトの展覧会を開催した。アアルトの建築物や家具はシンプルさと温かさを兼ね備えており、フィンランドという国の一面を知らせてくれた。そして日本－フィンランド国交樹立100周年を迎えたこの春に、東京ステーションギャラリーではフィンランドのまた違った一面を知らしめてくれる展覧会が開催された。

ルート・ブリュック（1916－1999）は、フィンランドの名窯アラヴィアの専属アーティストとして活動した女性作家である。当初は建築家になりたいと思っていたが、家族の反対にあい、方向転換したそうである。この展覧会の前半では彼女の愛らしさが全開となっているような、色彩豊かな作品が出品されているが、それらはおそらく建築では表現できないものであろう。その意味では、方向転換による恩恵があったといえるかもしれない。また、釉薬の輝きには眼を見張るものがあり、私たちに宝石を見るかのような喜びを与えてくれるが、それも陶器だからこそ得られる体験である。

展覧会前半では人や動物、蝶などを題材にした具象的な作品が並ぶが、後半になると様子が一変し、小さなタイルを組み合わせた作品が多くなる。それぞれが異なる小さなタイルのピースは、抽象的でありながら有機的で、全体としてでこぼことした味のある作品が出来上がっている。フィンランドの自然や風土からインスピレーションを得たのであろう作品群は、前半とはまた違ったルート・ブリュックの個性の表出となっている。これらは市庁舎、銀行、大統領邸などの壁面を飾る大型のインスタレーションへと発展した。

タイルのピースを組み合わせた作品群は東京ステーションギャラリーの古めかしい煉瓦の壁と見事に呼応しており、その場であるからこその展示が実現されていた。この展覧会を通じて、つくづく作品との出会いにおいて場の力は大きいと感じさせられた。（AN）

《ライオンに化けたロバ》1957年、
タピオ・ヴィルカラ ルート・ブリュック財団蔵
Tapio Wirkkala Rut Bryk Foundation’s Collection /
EMMA – Espoo Museum of Modern Art
©KUVASTO, Helsinki & JASPAR, Tokyo, 2018 C2531

展評

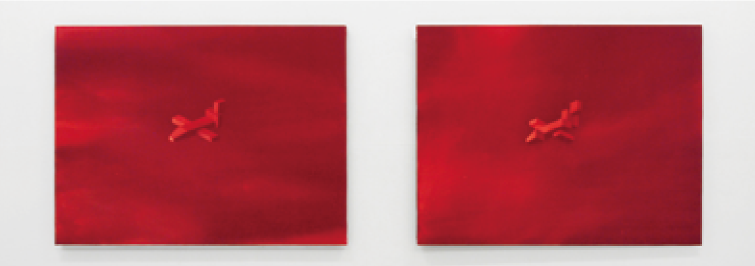
2019年５月18日～６月22日
ケンジタキギャラリー(名古屋市中区栄)

染谷亜里可 展 – *Left inside Right*

ギャラリーの白い壁面には、同じサイズのキャンバス８点が二点ずつ“対”の様に展示されていた。それぞれの画面には６つの積み木を組んだ構造体が見る角度を変えて描かれている。

例えば、「最初」となる一点には、積み木によって組まれ、ワインレッドの空を行く飛行機が遥か上空から見下ろす角度で描かれている。対となるもう一点では、その視線は正反対のベクトル、言わば「裏」から見えるであろう光景が、見上げた構図で描かれる。その後、機体は分解され、６つの積み木は全く異なる形態に再構成される。観る者は、分解され、組み上げられた６つの積み木の形態に、「転回」の法則と「裏」からの視点を探ろうとするが、やがて、表と裏のそのパースペクティヴが決して合致しないことに気付くことになる。

作家によると、その転回とは、「ひとつひとつの箱を裏側(あるいは内側)の形に転換」したものだと言う。そうしてできた「虚像」は、次のキャンバスでは、「現実」の静物として描かれる。「実際に観ることと、ルールで転換されること」が交互に行われ、俯瞰と仰視によって描かれた８点のシークエンスは、見る者に錯覚と浮遊感を感じさせる。見る角度によって光を反射させるベルベットの光沢が触感を伴い、その肌触りがそうした情緒をさらに強めている。



展示風景
《Decolor – Third Reverse（airplane １）（airplane ２）》
2018年　ベルベットを脱色　各97×127cm

ベルベットについて作家は次のように語ってくれた。

「ベルベットの明るさや暗さは夢の中や頭の中で見る映像のトーンに似ていると感じています。」

ベルベットを脱色して描く「Decolor」という技法によって制作されたこれまでの作品、例えば日常の身の回りのモノや風景を投影した画像には、アンニュイな表情を見せながらも、消滅して行く予感と儚さすら漂わせていた。

今回の展覧会タイトルに付された副題「*Left inside Right*」とは、「鏡に差し出した右手と鏡に映ったその手について」を指すという。素朴な疑問から始まった実像と鏡像に関する摸索は、より重層的な構造と「造形性」を作品に与えつつある。「third reverse」(第三の転回)によって連続して提示される平面は、「窓」と「鏡」に譬えられる絵画に対する優れた実験でもある。

染谷亜里可は、1961年生まれ。愛知県立芸術大学大学院修了。現在、三重県員弁郡在住。(J.T.)

CULTURE,MOVIE,DRAMA&MUSIC

カフェ文化

愛知・名古屋には喫茶店文化というものがある。モーニングが充実していることは有名で、しばしばテレビでも採り上げられるが、それでは最近の事情はというと、若者向け、あるいは大人向けのお洒落なカフェが続々誕生している。それは、レトロな喫茶店とは少し違ったカフェ文化かもしれない。仕事に行く前やお昼休み、帰り道に一息ついて珈琲を飲んだり、友達と入っておしゃべりしたり、勉強や仕事をしたり、カフェにはいろいろな利用法があるが、カフェが増えたということは、人々がそういったいわば余剰の時間を持つこと、日々の生活の中で少しのゆとりをもつことを普通に楽しむようになったという時代の変化なのだろう。

海外に目を移してみると、なんといってもカフェといえばパリである。今でもパリには多くのカフェがあるが、一世紀ほど前のパリのカフェにはさまざまな芸術家たちがたむろし、そこで議論したり騒いだりスケッチしたりしながら芸術作品を生み出していった。モディリアーニやキスリング、パスキン、藤田嗣治など、エコール・ド・パリの錚々たる画家たちも皆、カフェに集っていた。モンマルトル、モンパルナス、サン＝ジェルマン＝デ＝プレ、といった場所には多くのカフェがあり、そこには芸術家たちの青春時代があった。今や書籍から当時の雰囲気を推察することしかできないが、カフェというものが本当に生き生きと活気づいていた時代だったのだろう。

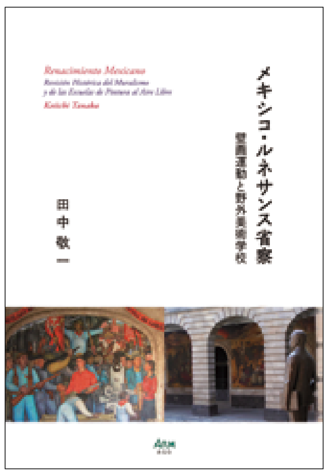
もうひとつ挙げるとすれば、ウィーンもまた、カフェの街である。やはり一世紀ほど前には多くの芸術家たちがカフェで作品を生み出していった。中には「カフェ文士」と呼ばれる作家のアルテンベルクのように、とあるカフェを自分の住所としていた変わり者もいたらしい。

パリやウィーンの華やかなりし時代とは違っているが、現在の日本のカフェにおいても多くの人々の青春や人生のドラマが繰り広げられているのだろうし、ひとつの豊かな文化としてカフェが存在しているように思う。そして文化というものが遊びやゆとりの中から生まれてくるということをカフェが教えてくれているような気がする。ちなみに、美術館のカフェというのもなかなか良いものである。展覧会限定メニューなども提供される場合があるので楽しみである。（AN）

BOOK

『メキシコ・ルネサンス省察
壁画運動と野外美術学校』

（田中敬一、あるむ、2018年）



本書は、愛知県立大学外国語学部で教授を務めていた著者が、メキシコ美術についてこれまでに発表してきた論文と講演内容を一冊にまとめたものです。「メキシコ・ルネサンス」という一分野が当館のコレクションの柱であることは、おそらく『アートペーパー』の読者の方ならよくご存知のことでしょう。20世紀の中でも特に、革命による国土の荒廃から立ち直る過程にあった1920年代から30年代にかけて、質量共に充実したメキシコの美術をこのように呼び、とりわけ「壁画運動」と「野外美術学校」という２つのユニークな活動が大きな成果を上げたことで知られています。（ちなみに「メキシコ・ルネサンス」という言葉は、メキシコ壁画運動に携わったフランス人画家、ジャン・シャルローの呼称に由来することが本書で指摘されています）。当館でもメキシコ・ルネサンスがいかなるものか折に触れて紹介してはいますが、概略以上の内容をなかなか伝えられていないのが現状かもしれません。

本書は、個々の美術家についての紹介や図像の詳細な分析・解釈ではなく、メキシコ・ルネサンスの諸活動が興隆・衰退するに至った原因、社会背景や政治的思惑についての考察を目的としています。当時、３つのグループ（インディオ、メスティーソ、スペイン系白人）で構成される国民を統合すること、なかでも先住民インディオの社会的孤立を解消することが国家発展のための大前提とされていた事実をまず知ることが、メキシコ・ルネサンスの理解には不可欠であると本書は教えてくれます。（インディオは80以上の部族に分かれており、その大半は相互に意思の疎通ができなかったそうです）。公共空間の壁面にメキシコの歴史や生活をテーマにした絵を描いたねらいは、全国民の約80％を占めた読み書きのできない人々に歴史や革命の意義を伝えると同時に、国民の意識的統一を図ることであったと著者は論じています。

本書は２部構成で、第Ⅱ部では北川民次、イサム・ノグチ、岡本太郎（いずれも当館が作品を所蔵する作家）とメキシコとの関わりが考察されています。(nori)

【編集後記】

８月１日より名古屋市美術館でも「あいちトリエンナーレ2019」が開催されます！今回のテーマは「情の時代」。「今人類が直面している問題の原因は『情』（不安な感情やそれを煽る情報）にあるが、それを打ち破ることができるのもまた『情』(なさけ、思いやり)」。アートを通し人々の情けに訴えかけ、問題解決の糸口を探っていくという思いで様々な現代アート作品を展示します。

最近観た「ザ・スクエア　思いやりの聖域」という、カンヌ・パルムドールを受賞した映画でも、「情報」と「情け」をモチーフにした物語が描かれており、いろいろ考えさせられました。現代アートの美術館を巡る物語なのですが、主人公のキュレーターが手掛ける展示が、通りかかる人々を利他主義へと導こうとするインスタレーションとなり、他人を思いやる人間としての役割を訴えかける一方、PR会社の炎上マーケティングにより人々の非難の的になってしまいます。

ネットの発展により情報が人々の不安を煽る現代社会の闇と、そんな社会でのアートのこれからの役割を、「情」というキーワードで一度考えてみませんか？（NO）

アートペーパー第111号 発行日：2019年８月１日
発行 名古屋市美術館
[芸術と科学の杜・白川公園内]
http://www.art-museum.city.nagoya.jp/
〒460-0008
名古屋市中区栄二丁目17番25号
地下鉄《伏見駅・大須観音駅・矢場町駅》下車
Tel.052-212-0001 Fax.052-212-0005
休 館 日：毎週月曜日(祝休日の場合は翌平日)
　　　　　年末年始
開館時間：午前９時30分～午後５時
　　　　　祝日を除く金曜日は午後８時まで
　　　　　※入場は閉館の30分前まで
Nagoya City Art Museum

執筆者／深谷克典(F)、井口智子(I.)、保崎裕徳(nori)、竹内智哉(TT)、竹葉丈(J.T.)、角田美奈子(み。)、中村暁子(AN)、清家三智(3)、森本陽香(haru)、野並リーザ(NO)